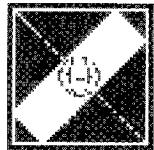
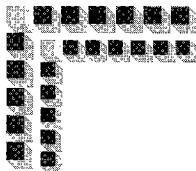


委員会から



産学協同を推進する IFIP

－ 情報処理国際連合 －

情報処理学会 IFIP 委員会委員長

IFIP 副会長 三浦武雄 ((株) 日立製作所名誉顧問, 本学会元会長)

昨年の本誌8月号に掲載したIFIP委員会からの報告「最先端のIT（情報技術）を目指すIFIPと日本の活動」以降のIFIPの主たる会議とこれを通じての新しい動きについて述べる。

まず1998年の大きな行事は8月31日～9月4日オーストリア（ウィーン）／ハンガリー（ブダペスト）において開かれたWorld Computer Congress98である。参加登録者71カ国、1,139人（日本50人）で盛大に終了した。

年次総会（General Assembly）98が引き続きブダペストで開かれ、ここでのトピックスは私がIFIP理事に再選されたことと、4つのIFIP Strategic Planningが掲げられ、我が国より提案していた

- (1) 米国からのIFIPへの参画の推進と米国におけるIFIPのvisibilityの向上
- (2) 産業界からのIFIP参加者を募ったプログラムの発足

が採用され、そして従来の「1国1代表制」の例外として米国からはACMとIEEE-CSの2代表が認められたことである。

次いで、IFIP理事会（Council）99が本年3月インドのゴアで開かれ、この席上で我が国から上記のStrategic Planningの主旨に沿って、我が国の企業協会であるJEIDA（(社)日本電子工業振興協会）をIFIPの活動に参加させたい旨の提案を行った。そして各国についても同様の検討をすることを勧めた。これについては、前向きな多くの意見が出され、JEIDAのIFIP-WGでの活動が認められた。

そしてこれらを踏まえ、私はIFIP会長より内々に次回の年次総会でIFIP副会長にノミネートしたい旨の打診を受けた。

その総会が去る9月マレーシアのクアラルンプールで開かれ、席上、IFIP副会長に選任された（任期：2000年9月まで）。そして特命事項として

- (1) Committee for Cooperation with Industry
- (2) Nomination Committee for Trustee

の両委員長を務めることになった。

前者は、私がIFIP日本代表として終始その重要性を訴えてきた課題であり、責任の重要性を痛感するものである。

幸い委員にACM、IEEE-CSの2代表が参加することになり、内容の充実に協力していただけるかと期待している。

以上のようにIFIPは従来大学を中心にアカデミックな集まりとして運営されていた現状から脱し、事業を踏まえた実践的な企業の参加が両者にとりシナジー効果の發揮、スピード時代への対応、標準化の推進等に効果があるものと認識された結果であると考える。

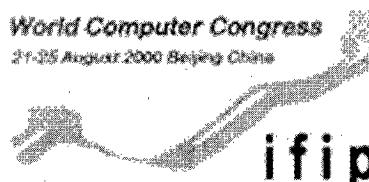
今後、我が国がリーダシップを發揮し、これに応える絶好の機会でもあり、JEIDAに対しても十分に対応していただくことをお願いしている。

本学会も、もともと本学会が1960年に創立される契機となったIFIPの、以下に紹介される各TC-WGに積極的に参加し、大いに意見を述べ、我が国からの情報を発信するように努力していただきたいと思う。

なおIFIPでは、現在、来る2000年の8月に中国・北京にて開催されるWorld Computer Congress2000の講演発表を募っている。

各位には奮ってのご参集を期待したい。

WCC2000ホームページ：<http://www.wcc2000.org/>



ifip

● TC の動き ●

TC1 (Foundations of Computer Science)

日本代表：伊藤貴康（東北大）

1997年にTC1が発足してから、この2年間に、Continuous Algorithms and Complexity, Descriptive Complexity, System Specification, Learning Theory, Cellular Machines, Term Rewritingについての6つのWGが編成されている。1998年8月にCzechのBrnoで開催されたTC1会議で2000年8月に日本（仙台）で第1回IFIP TC1 International Conference on Theoretical Computer Scienceを開催することが内定し、その後、電子メールによる連絡等で伊藤貴康をGeneral Chairman of the Conferenceとし、(G. Ausiello, W. Brauer, T. Ito, J. Staples, J. Traubの5人からなる) Steering Committeeを編成し企画が進められた。なお、伊藤からの要請によりTC1 ChairのG. AusielloをConference Co-Chairとすることにした。1999年5月に米国Atlantaで開催のTC1会議でその企画案が承認され、その後、プログラム委員会のCo-Chairも決まった。現在の概要は次の通りである。

- 会議名：International Conference on Theoretical Computer Science
- 開催日・場所：2000年8月17日～19日（於：仙台市・東北大）
- 議長：Takayasu Ito（東北大）、Giorgio Ausiello（Univ. di Roma1）
- Steering Committee：G. Ausiello, W. Brauer, T. Ito, J. Staples, J. Traub
- Program Committee Chairs：
 - TRACK (1) : Jan van Leeuwen (Univ. of Utrecht), Osamu Watanabe (東工大)
 - TRACK (2) : Peter D. Mosses (Univ. of Aarhus), Masami Hagiya (東大)

会議の詳細については、URL:<http://tcs2000.ito.ecei.tohoku.ac.jp/tcs2000.html>に公開予定。TC1の当面の最大の目標は上記の会議を開催し、成功に導くことにあるが、新しいWGの設置や理論についての賞を設けることも引き続き検討されている。

TC2 (Software : Theory and Practice)

日本代表：筧 捷彦（早大）

現在次の9つのWG (Working Group) をもって活動している。

- WG2.1 アルゴリズム言語と計算
- WG2.2 プログラミング概念の形式記述
- WG2.3 プログラミング方法論
- WG2.4 システム構築用言語

- WG2.5 数値ソフトウェア
- WG2.6 データベース
- WG2.7 ユーザインターフェース工学
- WG2.8 関数プログラミング
- WG2.9 ソフトウェア要求工学

それぞれのWGは、その対象分野のエキスパートをメンバとして年1～2回の会合をもって研究交換を行うとともに、WC (Working Conference) や SA (state-of-the-art seminar)などを企画し実行している。最近になって、ソフトウェアアーキテクチャを対象分野とする新しいWGを設けるべきではないか、との議論が持ち上がり、その状況判断も兼ねて、1999年2月22日～24日にSan Antonio (USA)でTC2企画のWCを開催した。論文募集への応募者を主体に約100名を集め、34の発表論文を核に6つの小グループに分かれての活気ある議論が行われるなど、盛況であった。この結果を受けて、C.Hofmeister (Siemens, Germany)を委員長とする設置委員会を設け、WG2.10を正式に発足させる準備に入った。

2000年のWCCでは、TC2のChairmanもそのCo-ChairmanとなってICS2000 (International Conference on Software - Theory and Practice)を開催する。そのプログラム委員には、本学会のソフトウェア工学研究会のメンバも入っている。現在、論文募集中である。

なお、TC2の活性化を図る方策の1つとして、若手研究者に対する「論文賞 (best published paper)」を出すことを検討することになった。

1998年から2000年にかけてのTC2傘下の活動の一部を示しておく。

- WC (WG2.2,WG2.3) : Programming Concept and Methodology (PROCOMET'98), May 1998, Shelter Is. (USA)
- WC (TC2) : Software Architecture, Feb. 1999, San Antonio (USA)
- OC (TC2) : Formal Method (FM'99), Sep. 1999, Toulouse (France)
- WC (WG2.6) : Visual Database (VDB-5), May 2000, Fukuoka (Japan)
- OC (TC2) : ICS2000 (in WCC2000), Aug. 2000, Beijing (China)
- SA (WG2.3) : State-of-the-Art Seminar, Sep. 2000, Recife (Brazil)
- WC (WG2.5) : Software Architectures for Scientific Computing, Oct. 2000, Ottawa (Canada)

TC3 (Education)

日本代表：大岩 元（慶大）

TC3の代表は、1998年度まで高橋延匡教授（拓大）が担当されていたが、昨年ウィーン・プラハで開かれたWCC98の折りにTC3 ChairであるBrian Samways氏立ち合いのもとで大岩に引き継がれた。1998年度のTC3関係で日本が関与した大きな活動はWG3.4による次の会議を行ったことである。

- ・会議名：ネットワーク時代の情報専門家教育国際会議（International Working Conference – Educating Professionals for Network-Centric Organisations）
- ・主催：IFIP/TC3/WG3.4
- ・共催：情報処理学会、日本教育工学会、教育システム情報学会
- ・日時：1998年8月23日（日）～28日（金）
- ・開催地：国立婦人教育会館（埼玉県嵐山町）
- ・委員長：大槻説乎教授（広島市大）
- ・参加者：80名、うち海外8カ国、25名

この会議はWG3.4日本代表の角行之氏（日立）の献身的な活動によって好評裡に終了した。その結果は

Peter Juliff, T. Kado, Ben-Zion Barta (Eds) :Educating Professionals for Network-Centric Organizations, Kluwer Academic Publishers (1999)

として出版された。この本に対してTC3 ChairのBrian Samways氏から角氏に

I am particularly pleased to see a book that has a place in both Business/Management and in Training, and feel that with the proper marketing Kluwer could sell many copies. Certainly there is nothing else on the market that covers these areas together, as well, and my congratulations to the Authors and the Editors.

というコメントが寄せられている。

本年はこれに統いて米国で会議を行う予定であったが、参加者が集まらずに、流会になった。最も財政状況のよいWG3.4がこの状態であることから、TC3全体の再構築が図られているようである。残念ながら、本年8月に開かれたTC3の会議には出席できなかったために、詳細については報告できない。

TC5 (Computer Applications in Technology)

日本代表：木村文彦（東大）

TC5は、工学・工業におけるあらゆる計算機応用を対象としており、活動が広範囲の産業分野・団体に拡散していく傾向にある。近年の情報化の急激な進歩に応じて、WGの再編や期間限定のプロジェクト推進などを具体的活動として盛り込んだ、新しいビジョンの策定にとりかかった。「グローバルな産業競争力強化のための先端情報技術」と題して、各WGなどで議論が継続中である。98年度には、生産における情報環境、仮想企業体のモデリング、知識集約型CAD、形状モデリング、生産システムの実時間制御、数値制御加工などの分野について、我が国で開催の2件を含めて17件の国際会議やワークショップが開催され、その内容は大部分がIFIPの出版を請け負うKluwer社から単行本として出版されている。

定期的に開催されている生産管理や仮想企業体モデリングなどの国際会議やワークショップに加えて、仮想企業体の性能評価、ビジュアルコンピューティング、仮想現実世界の構築とモーションキャプチャリング、ラピッドプロトタイピングなど

さまざまな主題について、比較的小規模で技術的に特化した各WG主催の国際会議が計画されている。また、IFIPの全体会議であるWorld Computer Congress 2000 (Aug. 21-25, 2000, Beijing, China)において、高度情報技術に支えられた将来のビジネスプロセス革新を目指して、TC5の組織による国際会議ITBM2000 (International Conference on Information Technology for Business Management) が開催される予定であり、関連WGにおいて準備が進められている。

WG5.2 (CAD) とWG5.3 (CAM) の統合、PDM (Product Data Management)・情報環境、迅速製品開発などについてのWGの新設が議論されている。また、情報・通信・自動化技術の統合、シミュレーションやモデリングのための可視化・インタラクション技術などのプロジェクトが計画されている。

TC6 (Communication Systems)

日本代表：斎藤忠夫（東大）

TC6はネットワーク全般を分野としており、光通信、ATM、移動無線のようなハードウェアに近い通信技術から、ネットワーク管理、通信品質、性能評価のようなネットワーク総合化技術、さらに電子出版のようなアプリケーションをカバーして定常的に年20件程度のワークショップ、ワーキングカンファレンス、カンファレンス等の会議を開催している。これらの会議の大部分はヨーロッパで開催され、それ以外の地域で開催される会議は数件に留まる。1998年にはTC6のWG6.8が開催するPWC (Personal Wireless Communication) のワークショップを東京で開催した。これについてはすでに報告済みであるが、約120名の参加者を得て成功した。

99年度にはTC6が主催する日本国内で開催する会議は存在しない。TC6と協力関係にあるICCC (International Conference on Computer Communication) は1999年9月に東京で開催され、TC6はこれを支援している。アジア地区では1999年10月に北京でPSTV/FORTEが、11月初旬に香港でBroadband Communications'99が、11月下旬にはバンコクでSmartnet'99が開催される。これを機会にアジア地区のTC6に対する関心を高めてゆくことにしている。

TC7 (System Modelling and Optimization)

日本代表：矢島敬二（東京理科大）

システムのモデル化と最適化を主題とするTC7は2年に1度国際会議を開くが1999年度はイギリスのケンブリッジで7月12日～16日の間に開かれた。参加者は200人前後で小規模であるが情報交換の機能を果たしていると思われる。なお、2001年の会議はドイツの古都トリールが予定されている。TCの委員は順次この国際会議を主催しているが、1997年はデトロイトで開かれた。この会議の総括は1998年4月のTCで行われたが、概して成功と評価された。問題点の1つは東ヨーロッパからの報告者の欠席いわゆる“no show”の率の高さであった。TC7の取り扱うテーマはモデル化であり、最適化であるので必ずしもハードウェアが潤沢に利用可能でなくても研究を進め

ることができ、東ヨーロッパからの参加希望者が多いのであるが、報告を実現するには各種の困難が伴う。IFIPでは各TCの目的、範囲の検討を行っているが、TC7に関しては時宜にかなった作業グループ(Working Group)の新設が検討され(1)不連続事象とモンテカルロシミュレーション、(2)フラクタル・カオス理論、を作ろうという提案が検討されており、さらにはバーチャルリアリティ=バーチャル環境=科学的視覚化なども討議されている。これらについては他のTC、特にTC5との関連を十分に考慮すべきであると指摘されている。

日本についていえば日本が得意とする分野、たとえばアニメーション技術の科学的視覚化への応用など積極的に参画できるものを考える必要があろう。

なお、現在の7つのWGは次の通りである。

1. Modelling and Simulation
2. Computational Techniques in Distributed Systems
3. Computer System Modelling
4. Discrete Optimization
5. Reliability and Optimization of Structural Systems
6. Optimization-based Computer-aided Modelling and Design
7. Stochastic Optimization

TC8 (Information Systems)

日本代表：内木哲也（東洋大）

TC8の各国代表による会議は年に1度開催されている。昨年はWCCの前にオーストリアで開催され、来年も同様にWCCの前に香港で開催される予定である。本年はWCCの年ではないため、欧州情報システム会議(ECIS)に合わせて6月下旬にコペンハーゲンで開催され、16カ国の代表と4つのWG主査が参加した。本年は昨年に引き続き、TC8国際会議と会議録出版の可能性について議論した。TC8国際会議はここ数年開かれていなかった。その理由としては、情報システム研究がビジネススクールの研究者を中心になされていることと、すでに彼らにはICIS、ECIS、PACSISなどの主要な国際会議があるため、新たにTC8で会議を設ける意義は薄いということを挙げることができる。そのため、今回も国際会議を設けることは否定的意見が多く、これまで同様にTC8がICISをはじめとする情報システムの国際会議を共催もしくは支援することで合意した。また、出版物についても単なる国際会議録や論文集などでは市場が期待できないために否定的意見が圧倒的であったが、情報システム研究の哲学やビジョンを示すものであれば可能であろうとの合意を得た。本件については今後も継続して検討される予定である。WG活動はWG8.1、WG8.2、WG8.6を中心に活発に行われており、今回新たに“Organizational Engineering”と“Unified Modeling Language and Associated Processes”的研究グループの設置が承認された。一方、WG8.4の活動は不活発であるため、統廃合を含めた対策が今後の課題となっている。

情報システム研究では、近年AIS (Association for Information Systems)が設立され、TC8同様にICISをはじめとする国際会議を共催および支援している。今回TC8議長より、

AISとTC8との相互的活動について提案がなされた。TC8が研究領域ごとのWGから成り立っているのに対して、AISはアメリカ、欧州、アジアの各地域ごとの研究グループから成り立っているため、相互交流によって地域特性を考慮した研究の場が提供可能であろうという提案であった。TC8メンバにはAIS会員が比較的多いものの、情報システムに対する認識の相違やAIS活動がまだ始まったばかりであることなどから、慎重論が多く聞かれた。しかし、今後の課題として継続して検討される予定である。

TC9 (Relationship between Computers and Society)

日本代表：黒川恒雄（国学院大）

TC9の年会議は毎年1回、WGのInternational Working Conferenceと併設して開催される。1998年は8月にスイス、ジュネーブで5th World Conference on Human Choice & Computerが“Computers & Networks in the Age of Globalization”(HCC-5)のタイトルの下で開催された。また、9月の世界コンピュータ会議(オーストリア、ウィーンおよびハンガリー、ブダペスト)では“KnowRight'98”(2nd International Conference on Intellectual Property Rights for Multimedia and Data Highways)を開催した。

WGの活動はWG9.1が“Participatory Design Conference”(PDC)を11月に米国シアトルで開催。WG9.2は情報倫理関連の“An Ethical Global Information Society, Culture and Democracy Revisited”(J. Berleur & D. Whitehouse)を2月にChapman & Hallから出版した。WG9.6は“Half-day Seminar on IT-Security in Society”をスウェーデン、ストックホルムで開催した。1999年は当初マレーシアでTC9年会議を、WG9.4が開催予定の国際会議と3月併催する予定であったが、同国の経済危機のため国際会議は開催不可能となりTC9年会議は開催地をスウェーデン、ストックホルムに急遽変更し、6月に開催された。WGの活動はWG9.1がco-sponsorとして“Human Computer Interaction”的第8回国際会議を8月ドイツ、ミュンヘンで、WG9.2は夏期学校を8月スウェーデンで、WG9.5は“Virtual Environments'99”を6月ドイツ、シュツットガルトでそれぞれ開催の予定である。

なお、WG9.6はWG8.5と合同国際会議“User Identification and Privacy Protection-Application in Public Administration and Electronic Commerce”を6月、スウェーデン、ストックホルムで開催する。

本学会においても昨年4月「電子化知的財産、社会基盤」研究会が発足した。情報資産の保護や情報倫理を主要テーマとしているTC9の各WGの研究活動に積極的に参加されることを期待したい。

TC10 (Computer Systems Technology)

日本代表：南谷 崇（東大）

TC10はコンピュータシステムの各階層における設計・評価技術とその概念、方法論、ツールに関する情報交換と協調促進を目的としている。98年度のTC会議はWCC'98に続く9月4, 5日にブダペストで開催された。99年度は8月30, 31日にツールーズで開催された。6つあるWGのうち、特に活発なのは、

- WG10.3 : Concurrent Systems
- WG10.4 : Dependable Computing and Fault Tolerance
- WG10.5 : Design and Engineering of Electronic Systems

である。WG10.3では、1998年10月にパリでPACT'98を開催し、150名の参加者を得て大成功を収めた。

WG10.4では、1998年6月にミュンヘンでWG会議を、1999年1月にハワイでWG会議と自動車エレクトロニクスのディベンドビリティに関するワークショップを開催した。またこの会議で、IEEE-CS主催のFTCS (Fault-Tolerant Computing Symposium) とIFIP WG10.4主催のDCCA (Dependable Computing for Critical Applications) を発展的に併合してIFIP/IEEE共催の新しい国際会議ICDSN (International Conference on Dependable Systems and Networks) をスタートさせることが提案され、1999年2月に開催されたIEEEのFTC技術委員会でも承認された。第1回のICDSNは2000年6月にニューヨークで開催される。また現在、コンピュータシステムのDependability Benchmarkingに関するSIG発足に向けて準備を進めており、そのための技術課題、活動計画を検討するワークショップを1999年6月に米国ウイスコンシンで開催した。WG10.5では、1998年9月にドイツでCorrect Hardware Design and Verification Methodsに関する国際会議を、1999年3月にミュンヘンでDATE、6月に米国でCHDLを開催した。12月にはリスボンでVLSI国際会議の開催を予定している。

TC11 (Security and Protection in Information Processing Systems)

日本代表：黒川恒雄（国学院大）

TC11の年会議はIFIP/SEC Conference (IFIP情報セキュリティ国際会議) の呼称で毎年1回各国持ち回りで開催される。1998年は第15回世界コンピュータ会議の一環として8月31日から9月4日の期間IFIP/SEC Conference "the Global Information Society on the Way to the Next Millennium" が、前半はオーストリアのウィーンで、後半はハンガリーのブダペストで開催された。セキュリティは世界コンピュータ会議の主要テーマの柱であり、Security Architecture, Access Control, Digital Signature, Network Security, Security Devices, Public Key Infrastructure, Hungarian IT Security Human Factors Modeling for Security, Malicious Softwareなどの分野に分かれ提出された論文の発表、討議が

行われた。

WGの活動としてはWG11.3の第12回 "Database Security" 国際会議が7月ギリシアで、WG11.5の "Integrity and Internal Control in Information System" が11月米国でそれぞれ開催された。

1999年のTC11会議は9月末オランダ、アムステルダムで開催。毎年5月、各国持ち回りで開催されていたIFIP/SEC International Conferenceの開催が予定国インドの準備不可能との事情による。なお、2000年に関しても開催国中国の準備不十分のため、WCC2000 (8月開催) に統合して実施する方針を固めた。

1999年中に予定されているWGの活動は、WG11.1と11.2の第7回合同会議 "Information Security Management & Small Systems Security" が9月30日～10月1日アムステルダムで、WG11.3は "Database Security" を7月米国で、WG11.5は第3回 "Integrity and Internal Control in Information Systems" 国際会議を11月アムステルダムで、また、WG11.8は第1回 "Information Security Education" 国際会議を6月ストックホルムでそれぞれ開催する。なお、TC11はTC6と "Communication and Multimedia Security" を9月ベルギーで共催の予定。1998年4月本学会にも「コンピュータセキュリティ」研究会が発足した。TC11の各WGの研究活動に積極的に参画されることを期待したい。

TC12 (Artificial Intelligence)

日本代表：堂下修司（龍谷大）

TC12は、計算機科学を基礎とした人工知能の研究と人工知能と他の情報処理技術分野との交流を目的として、1989年に設立され、1991年から活動を開始した。当初は、WG12.1知識表現、WG12.2機械学習、WG12.3推論技法、WG12.4自然言語処理、WG12.5知識ベース応用の5ワーキンググループでスタートしたが、活動が思わしくなく、現委員長になって、整理を行い、現在はWG12.2機械学習、WG12.5知識ベース応用、および立ち上げ中のWG12.6 Intelligent Information Management (知的情報処理) がある。

しかし、その活動は必ずしも活発ではない。会議への各国の委員の出席も思わしくない。その理由は、設立後古典的AIブームが終焉したこと、AIがまだ他の情報技術と直接的なかわり合いを持つに至っていないこと、純学術活動においては、すでにIJCAII, AAAI, ECCAI, PRICAI等の強力な国際的専門団体があり、その中のIFIPのTC12の位置づけと役割が明確でないこと、また国内的には、人工知能学会が別団体として組織されていること等で、かなり本質的な問題がある。しかし、AI分野において、これまでの純粋AIから、知的問題解決の基本手法としてのAIとして、ゲーム、RWC、ROBOT等他の分野と結合した、新たな展開がはかられつつある。これにTC12がどのようにかかわるか、AIに対するIFIPのかかわり方を見直すことが必要である。

現在ドイツのB. Neumann教授が議長に就任し、知的メディアへの展開等その建て直しをはかっている。そのためには、AI分野において、IFIPの独自の世界的な役割は何か、純学問/技術分野としては、先述の他の諸団体との競合・協調の中で

TC12の独自性をどう發揮できるか、次世代の新しいAI技術の展開にどこまでリーダシップをとれるか、AIと現実社会とのかかわりをどう深めていくかなど基本的な課題がある。国内的には、知能と複雑系等の研究会やさらには人工知能学会との連携を強め、国内委員会を組織することも考えられる。

いずれにしても、TC12は1つの分岐点にある。しかし、知能化の観点からすると、現在の情報処理の諸技術はまだ初期の段階であり、将来において機械、人間、および社会を包含したトータルな情報システムの知的高度化のためには、もっと幅広いAI技術の発展、情報処理技術のパラダイムの転換が必須である。この立場から、TC12に我が国が積極的に参画する方策を進めたい。とりわけ、来年8月に北京で開催されるWCC2000において、TC12は中国側と協力してIIP2000 (Intelligent Information Processing) を企画しており、我が国からも委員を出している。隣国での開催でもあることから、日本としても積極的に参画することが望まれる。本学会の関係研究会、さらには人工知能学会の関係者のご協力を得たい。

TC13 (Human - Computer Interaction)

日本代表：黒須正明（静岡大）

TC13は、人間とコンピュータのインタラクション（HCI）に関する研究を推進するため、さまざまな活動を行っている。これらの活動は、WEBからも参照することができる（http://www.csd.uu.se/ifip_tc13/）。

98年度は、2月12日から13日までの2日間、スペイン北部のサンセバスチャンでTC13の委員会が開催された。

HCIの分野では、ACMのSIGCHIという学会が有名であるが、アメリカを拠点とするこの学会が技術中心的であるのに対し、TC13が主催するINTERACTという学会は、ヨーロッパ勢の比重が高く、どちらかというと人間にウェイトを置いた研究が多く発表される傾向がある。本年はイギリスのエディンバラで9月上旬に開催される（<http://www.bcs.org.uk/hci/i99/>）が、委員会では、その準備状況がイギリス代表から説明された。

INTERACTは隔年で開催されており、次のINTERACT2001の開催地を決める投票もその委員会で行われた。イタリアのピサと日本の東京が立候補しており、投票の結果、東京が次回の開催地として選定された。

前述のように、INTERACT2001は東京での開催が決定した。現在、そのための準備作業に着手している段階であるが、本学会が主催し、ヒューマンインターフェース学会（元、計測自動制御学会のヒューマンインターフェース部会）が共催する方向で準備を進めている。

この大会は、昨年、本学会が主催したAPCHI'98という国際学会に続くHCI分野での大きなイベントであり、大学や産業界におけるこの分野の研究・開発活動に大きな刺激材料となることが期待されている。

企業の立場からは、HCIの研究活動は利益につながるのか、という疑問が提示された時期もあったが、コンピュータの機能や性能が（一般的な用途に関していえば）飽和状態に近づきつつある現在、HCIが製品の新しい魅力として受け止められるようになりつつある。その意味では、さまざまな方向に展開

しつつあるHCIの研究活動を活性化させ、製品化に結びつけてゆくことは、大きな重要性を持つといえる。

IAPR (International Association for Pattern Recognition)

日本代表：江尻正員（日立）

IFIPにとっての最大のaffiliate memberとしてIAPR（国際パターン認識連盟）がある。これは、パターン認識関連分野での研究活動の活性化と研究交流の促進を目的とした国際組織である。98年度には、その最大の行事として、第14回パターン認識国際会議（ICPR）がブリスベンで開催され、500件近い論文の発表と、700名近い参加者があった。日本からの参加者は地理的な条件の良さもあって最多の151名となり、その活躍が目立った。この会議では、特に産業界からの論文発表と産学協同の研究発表を奨励しており、毎回、Best Industry-related Paper Awardが授与される。今回は米国企業の研究者が表彰された。IAPRは、この他にも数多くの会議を主催・共催・協賛している。日本でも2年ごとにMVA（IAPR Workshop on Machine Vision Applications）が開催され、マシンビジョン応用についての広範な議論が展開されている。98年度は、その創設十周年を祝い、幕張の富士通システムラボラトリを会場にMVA98が開催され、内外から約220名の参加があった。

次回の第15回パターン認識国際会議は、来年、バルセロナ（スペイン）で開催される予定であり、また、次々回の2002年の第16回会議はケベックシティ（カナダ）で開催されることが決定された。したがって本年度は、このバルセロナ会議に向かた準備の年として、各種委員会の組織化が進められる予定である。論文発表や委員会への積極参加などで、日本からの大きな貢献が期待されている。

一方国内でも、来年、MVA2000の開催が予定されている。そのため本年度は、開催に向けて準備を開始する年となる。すでに議論が始まっている、会場の選定など、一部準備作業に入っている。昨年度のMVA98では、創設十周年記念行事として、10年前の創設第1回会議で発表された論文の中から、この10年間技術的に色褪せることなく重要であり続け、かつ時代を画した5件の論文をMost Influential Paper of the Decade Awardとして表彰した。次回もこの賞を継続するべく、今度は第2回会議（MVA90）で発表された論文の中から、まもなく選定作業が開始される予定である。

（平成11年10月14日受付）

IFIP の TC と WG 一覧

TC 1: Foundations of Computer Science

- WG 1.1 Continuous Algorithms and Complexity
- WG 1.2 Description Complexity
- WG 1.3 Foundations of System Specifications
- WG 1.4 Computational Learning Theory
- WG 1.5 Cellular Automata and Machines
- WG 1.6 Term Rewriting
- WG 1.7 Theoretical Foundations of Security Analysis and Design

TC 2: Software: Theory and Practice

- WG 2.1 Algorithmic Languages and Calculi
- WG 2.2 Formal Description of Programming Concepts
- WG 2.3 Programming Methodology
- WG 2.4 System Implementation Languages
- WG 2.5 Numerical Software
- WG 2.6 Database
- WG 2.7 (= WG 13.4) User Interface Engineering
- WG 2.8 Functional Programming
- WG 2.9 Software Requirements Engineering

TC 3: Education

- WG 3.1 Informatics and ICT in Secondary Education
- WG 3.2 Informatics and ICT at the Level of Higher Education
- WG 3.3 Research on Education Applications of Information Technologies
- WG 3.4 Vocational Education and Training
- WG 3.5 Informatics in Elementary Education
- WG 3.6 Distance Learning
- WG 3.7 Information Technology in Education Management

TC 5: Computer Applications in Technology

- WG 5.2 Computer-Aided Design
- WG 5.3 Computer-Aided Manufacturing
- WG 5.4 Industrial Software Quality and Certification
- WG 5.6 Maritime Industries
- WG 5.7 Computer-Aided Production Management
- WG 5.10 Computer Graphics and Virtual Worlds
- WG 5.11 Computers and Environment
- WG 5.12 Architectures for Enterprise Integration

TC 6: Communication Systems

- WG 6.1 Architecture and Protocols for Computer Networks
- WG 6.2 Broadband Communications
- WG 6.3 Performance of Communication Systems
- WG 6.4 High Performance Networks
- WG 6.6 Network Management for Communication Networks
- WG 6.7 Smart Networks
- WG 6.8 Wireless Communication
- WG 6.10 Photonic Communication Networks

TC 7: System Modelling and Optimization

- WG 7.1 Modelling and Simulation
- WG 7.2 Computational Techniques in Distributed Systems
- WG 7.3 Computer System Modelling
- WG 7.4 Discrete Optimization

- WG 7.5 Reliability and Optimization of Structural Systems

- WG 7.6 Optimization-Based Computer-Aided Modelling and Design
- WG 7.7 Stochastic Optimization

TC 8: Information Systems

- WG 8.1 Design and Evaluation of Information Systems
- WG 8.2 Interaction of Information Systems and the Organization
- WG 8.3 Decision Support Systems
- WG 8.4 Office Information Systems
- WG 8.5 Information Systems in Public Administration
- WG 8.6 Transfer and Diffusion of Information Technology
- WG 8.7 Informatics in International Business Enterprises
- WG 8.8 Smart Cards

TC 9: Relationship between Computers and Society

- WG 9.1 Computers and Work
- WG 9.2 Social Accountability
- WG 9.3 Home Oriented Informatics and Telematics
- WG 9.4 Social Implications of Computers in Developing Countries
- WG 9.5 Applications and Social Implications of Virtual Worlds
- WG 9.6 Information Technology Misuse and The Law
- WG 9.7 History of Computing

TC 10: Computer Systems Technology

- WG 10.1 Computer-Aided Systems Theory
- WG 10.3 Concurrent Systems
- WG 10.4 Dependable Computing and Fault Tolerance
- WG 10.5 Design and Engineering of Electronic Systems
- WG 10.6 Neural Computer Systems
- WG 10.7 Microsystems

TC 11: Security and Protection in IP Systems

- WG 11.1 Information Security Management
- WG 11.2 Small System Security
- WG 11.3 Database Security
- WG 11.4 Network Security
- WG 11.5 Systems Integrity and Control
- WG 11.8 Information Security Education

TC 12: Artificial Intelligence

- WG 12.2 Machine Learning
- WG 12.5 Knowledge-Oriented Development of Applications
- WG 12.6 Intelligent Information Management

TC 13: Human-Computer Interaction

- WG 13.1 Education in HCI and HCI Curricula
- WG 13.2 Methodology for User-Centred System Design
- WG 13.3 Human-Computer Interaction and People with Special Needs
- WG 13.4 (= WG 2.7) User Interface Engineering
- WG 13.5 Human Error, Safety and System Development